

置法……………アルカリ処置法も同様であらう……………は仮令低濃度の硫酸を用ひるとしても、不備である事は争はれない。何等の前処置を加へる事なしに培養する事が最も安全であるが、さうする事の出来ない材料に就ては、抵抗性の弱い形態を傷害する事なしに、而も材料中に混在する雑菌を避けて培養する新しい方法の考案が要請せられる。

文 献

1. Canetti, G., Rev. Tuberc., 10 : 26, 1946.
2. 植田三郎, 前出.
3. 植田三郎, 山田 修, 前出.

結核菌検査に於ける染色陰性、培養陽性或は 染色陽性、培養陰性例の考察

植 田 三 郎

(本考察の要旨は日本臨牀結核10巻2号36頁に発表した。)

非抗酸性、易染性乃至易染性の形態を結核菌の發育形とし、抗酸性にのみ染色せられる形態をその変性形とする見方からすれば、表題の如き結核菌検査上の疑問にもよく解答が與へられる。

結核菌に及ぼすストレプトマイシン影響、特に その易染性形の変化に就て

兒 玉 得

(本稿の要旨は結核病学会近畿地方會に於て述べた。尙整形外科学雑誌に発表の予定である。)

流注膿瘍中の結核菌がストレプトマイシンの作用に依つて如何なる影響を蒙るか、主としてその形態及び染色性の変化を追求した。

(1) Slide culture method を用ひて、結核菌を塗抹した載物硝子をキルヒナー培養基中に浸して4日間培養した後、ストレプトマイシン(830~3300 γ)を含有する同培養基に移して6日間培養した。

テール・ハイデンハイン染色法(植田)で染色するに、易染性形中の易染性物質は2乃至4個の大小不同のある顆粒と成つて並び、時には顆粒以外の部分は淡く赤染するものもある。

(2) 被覆硝子培養法を利用して、上記同様6日間培養した場合(ストレプトマイシン210~3300 γ)も亦略々類似した所見を得た。

(3) ストレプトマイシン治療を続けた患者の流注膿瘍中の易染性形も亦、略々上記同様の形態染色性の変化を起した。

即ちストレプトマイシンの影響によつて、結核菌の抗酸性の形には殆んどその形、染色性に変化を見ないが、易染性の形は顯著な影響を蒙り、易染性物質は急ぎ凝縮して顆粒状と成る。此様な顆粒は時日の経過とともに抗酸性の顆粒に変化した。此様な時期の菌は卵培養基に移植しても、も早發育しなかつた。此事は他の面から見れば、易染性物質を持つた形態こそ結核菌の發育形であるとする考へ方を裏書きするものとも見られる。